

## 体育学部の発展のために ——意識改革と真剣味——

瀧 弘 之\*

私が中京大学にお世話になったのは、学生運動が一段落した昭和46年（1971年）であり、今年で勤続29年目（正式には28年）を迎える。体育学部40年の歴史の実に3/4近くを過ごしたことになる。当時お見えになった名物教授も亡くなられ、若手で元気のあった先生方の髪には白いものが目立つようになった。キャンパスはと言えば喧騒の中の名古屋から田畑の広がる広大な敷地の豊田に移転し、大学内外の環境は大きく変わった。当時背丈ほどにも満たない松の植林も大きく成長し、キャンパスはアカデミックで落ち着いた雰囲気醸成している。個性的で元気で上下関係に緊張感のあった学生達の姿も温和しくスマートなものに変わってしまった。ところで、少子化の流れは18才人口を年々減少させ、大学は淘汰の時代に入った。大学全入の時代が間近に迫り、大学が受験生を選ぶ時代から受験生が大学を選ぶ時代になるという。果たしてどのような受験生が我が体育学部を選んでくれるであろうか。昨年の週刊誌に以下のような文章が載っていたのでこの場をお借りしてその一部を紹介させて頂き、考えてみたい。

### ▶研究室

分刻みの仕事をしている教授の研究室に学生がぬっと入ってきて、紙を差出し、

「先生、これに、ハン（判）」

見ると、学生にとって重要な書類で教授の承認印が要るもの。学生が教授にモノを頼むにはそれなりの口のきき方があるにと、教授はわざと「何？」。

教授の意図に気づいて丁寧になるどころか、

「これに、ハン」

教授は祈るような思いでもう一度わざと「何？」。返ってきた言葉はさらに短く、たった一こと、

「ハン」

教授は言った。

「チョウ（丁）！」

きょとんとしている学生……………。

（略）

### ▶教室2

やはり学生で埋め尽くされた教室。真中あたりの4、5名の私語が続く。その周辺の学生は煩いと思いつつ見て見ぬふりをする。最もいらいらしているのはマイクを握りしめ懸命に講義している教授背を上げてそちらに視線を送り、「止めろ」のシグナルを発しても止まない。その間20分。遂に爆発、「出ていけ！」怒鳴ったものの、教授の心には空しさが残るのみ……………。

以上は特定の大学についてのことではない。どの大学にも似たような光景が見られる。現代学生気質は、無作法・無気力・無関心の「三無主義」。これに無学・非常識が加わって「四無一非主義」にならねばよいが。

（略）

\* 週間文春 立腹 土本 武司（筑波大学名誉教授・元最高検検事）

と立腹し憂えている。

\*助教授

ところで、Jリーグ発足当時、名古屋グランパスエイトの若手選手の食事の賄いを任された夫婦が、寮できちんと食事を取らない選手がいることに、「将来性のある若手プロ選手がこれでいいのか?」との思いを抱き、鹿島アントラーズの寮を見学に行ったところ、世界的なスーパースターのジーコが選手と一緒に食事をしている光景を目のあたりにし、これを球団フロント伝えたところ、「プロの選手というものは自分で考えて行動するものだ」、という答が返ってきた。少年時代から多くの選手を見て、食事を含めた日常からの自己管理がいかに大切かを身を以て体験してきたジーコ選手にとっては当たり前のことが行われていない。ちなみにジーコ選手は、41才になるまで第一線でプレーした。

球団の考え方の違いから、若手が着実に成長した鹿島とプロの自主性に任せた名古屋との間に大きな力の差となって現われてしまった。

Jリーグの話が続いてしまうが、8年前の1993年（平成5年）Jリーグが誕生した。試合は以前の日本リーグに比べものにならない程「面白くなった!」。1試合通してテレビの前に座っていることに苦痛を感じていた私も、2試合でも平気な程魅力的になった。前年に比べ選手の技術や体力、あるいは戦術眼が著しく高まったわけではない。最大の要因は、選手のサッカーに取り組む姿勢、すなわち、『意識改革』と言われている。

また、Jリーグ発足に遅れをとったジュビロ磐田は、『ミッション』として「人々に夢を与える存在になること」を掲げ、「常に優勝争いをするチームを目指すこと」、「世界に通じるサッカーを目指すこと」、という『ビジョン』を打ち出した。そして“スモールフィールド”という戦術でスペクタクルなサッカーを推進し、選手の強化ポイントをデータ化してチームづくりのための医療体制を整備するという具体的なチーム『ストラトジー』をもって、磐田をJリーグを代表するトップチームにならしめた。（磐田：荒田球団社長談）

体育学部を球団、選手を学生と置き換えた時、どのような学生を入学させ、4年間で人間として競技者として、はたまた体育・スポーツおよび健康実践の指導者として、その能力を最大限に引き出し社会に送り出すかを、改めて真剣に考えなければ、体育学部発展は望めないであろう。

体育学部の40周年を迎えるにあたり、体育学部および各コースの『ミッション』、『ビジョン』、『ストラトジー』を明確にし、共通理解のもとに新たな発展のためのスタートを切らなければならない。